

ツイステッド (TWISTED)

2004 (平成16) 年10月10日鑑賞〈道頓堀東映パラス〉

★★★★



監督＝フィリップ・カウフマン／出演＝アシュレイ・ジャド／サミュエル・L・ジャクソン／アンディ・ガルシア／デイヴィッド・ストラザーン (アスミック・エース配給／2004年アメリカ映画／97分)

……若くてカッコ良くて優秀な殺人課の女性捜査官を演ずるアシュレイ・ジャドだが、ことセックスに関しては、何とも積極的(?)。そんな女性捜査官が「関係」した男たちが、次々と死体に。被害者に共通する人間は私だけ。すると犯人は、ひょっとして私……? 何とも悩ましい女性捜査官のキャラと、あっと驚く最後のドンデン返しは、お見事!

第5章

映画のよしあしは俳優で決まる!

ツイステッドとは?

ツイスト (ダンス) がはやったのは、1960年代に入っすぐ。今から40年以上前のことだ。特別な作法やステップがあるわけではなく、ただ単純に腰を左右にくねらせて踊ればいい。それがツイスト。ここからわかるようにTWISTEDとは、「ねじ曲げられた」という意味。では一体、何がどのようにねじ曲げられているのか? それは、この映画を観てのお楽しみ……。まず、このタイトルを理解することが、この映画に興味をもつきっかけとなるはずだ。

坂和流の視点で見る、3人の女性捜査官比較

女性捜査官を主役にした映画の最高傑作は、何といてもジョディ・フォスター主演 (クラリス捜査官) の『羊たちの沈黙』(91年) だが、アンジェリーナ・ジョリーが主演 (スコット捜査官) した最近の『テイキング・ライブス (TAKING LIVES)』(04年) もその系譜にあるもの。他方、アンジェリーナ・ジョリーが女性捜査官となった『ボーン・コレクター』(99年) や、『羊たちの沈

黙』の続編で、ジュリアン・ムーアが女性捜査官となった『ハンニバル』(01年)、そして、ヒラリー・スワンクが女性捜査官となった『インソムニア』(02年)などもあるが、これらは女性捜査官が主役とはいええない位置づけのもの。

これに対して、本作は、殺人課の捜査官に出世したばかりのジェシカ・シェパード(アシュレイ・ジャド)が主役。そこで、①『羊たちの沈黙』のジョディ・フォスターと、②『テイキング・ライブス』のアンジェリーナ・ジョリー、そして本作のアシュレイ・ジャドを坂和の視点から比較してみたい。

何を比較……？

といっても、美貌、スタイル、演技力、実績、将来性等々、女優としての様々な能力を全般的に比較すれば大層なことになるので、ここでは3人の女性捜査官のパーソナリティ(キャラクター)について、少しだけ比べてみたい。

3人とも若くて優秀な捜査官という点では共通しているが、ジョディ・フォスター演ずるクラリス捜査官は、ひたむきでまっすぐな努力が報われる「成功物語」であるのに対して、アンジェリーナ・ジョリー演ずるスコット捜査官もアシュレイ・ジャド演ずるジェシカ捜査官も、女としての(女であるが故の)大きな挫折を体験する。スコットは、捜査の対象となった特定の人物(男性)に対して、個人的感情(はっきりいえば恋愛感情)を抱いたことによって大きく挫折し、そしてジェシカは、刑事としての仕事とは別のプライベートな世界における自由奔放な男性遍歴(はっきりいえば、セックス目当ての男遊びもしくは男漁り)によって、殺人事件の容疑者にされてしまうことに……。

ジョディ・フォスター(クラリス)は、あくまで優秀な捜査官として徹底していたから、何の非のうちどころもない捜査官だったが、アンジェリーナ・ジョリー(スコット)は優秀な捜査官でありながら、女であるが故の弱みを見せたところがユニークで結構面白かった(?)もの。ところが、アシュレイ・ジャド(ジェシカ)になると、その私生活はちょっとひどすぎる……？

なお、この『ツイステッド』は、キネマ旬報2004年10月下旬号(NO. 1415)で特集され、そこに新藤純子氏の『『ツイステッド』と女性捜査官の系譜』という面白い解説があるので、是非それも参考に……。

アシュレイ・ジャドという女優の魅力

私がアシュレイ・ジャドという女優を一番強く印象に残したのは、何といても『ダブル・ジョパディー』（99年）。その理由は3つある。その第1は、たまたま私が映画評論を書き始めた時期に重なっていたこと。第2は、この映画の「二重処罰の禁止」という憲法、刑事訴訟法上のテーマが、私が書こうと考えていた『映画と法律』というタイトル本のイメージにピッタリの題材だったこと。

そして第3は、この『ダブル・ジョパディー』におけるアシュレイ・ジャドの役割が、ハッピーな家庭の主婦、殺人犯、刑務所内での「ダブル・ジョパディー」の理解（いったん夫殺して有罪とされた人物は、「再度」夫を殺しても「再度」罪には問われないということ）、刑務所内での肉体の鍛練、仮釈放中の保護監察官の厳しい監視からの脱出、そして美しくドレスアップした姿での夫への復讐等々、ドラマティックで、非常に魅力的だったこと。

大ブレイクしてほしいものだが……？

私がこのアシュレイ・ジャドを最近見たのは、9月30日の『五線譜のラブレター（DE-LOVELY）』（04年）。ここでも彼女はいい味を出していたし、この『ツイステッド』でもそれなりの役をもらい、それなりの演技をしているのだが、私にとってはやっぱり、『ダブル・ジョパディー』のアシュレイ・ジャドが最も印象深い。たくさんの作品に恵まれ、演技力のしっかりした美人女優なのだから、私としては、もう一度むけて、私の大好きなニコール・キッドマンのように大ブレイクしてほしいと願っているのだが……。

3人の男優の魅力と位置づけは？

このアシュレイ・ジャド演ずるジュシカ捜査官を、主役としてひきたてているのが3人の男優。その第1は、ジュシカ捜査官と長年のパートナーであるマイク・デルマルコ（アンディ・ガルシア）。第2は、サンフランシスコ市警の本部長で、ジュシカ捜査官の父親死亡後、父親代わりの役割を果たしてきたジョン・ミルズ（サミュエル・L・ジャクソン）。そして第3は、サンフランシスコ市警

捜査官担当の精神科医師のフランク（デイヴィッド・ストラザーン）。

サミュエル・L・ジャクソンをはじめとする芸達者なこの3人の男優が、アシュレイ・ジャド扮するジェシカ捜査官を、それぞれの立場から支えるべく登場する。もっともこの映画は、タバコの火を手の甲におしつけられ、「柔スティック」という日本生まれの凶器で顔面をメッタ突きにされた被害者が、次々と発見されるという連続殺人事件がテーマだから、この3人の男たちも、その事件の展開にそれぞれ何らかの関係が……？

ジェシカ捜査官は淫乱女？

美人で優秀なジェシカが、殺人課の捜査官に昇格したのは、「実力」もさることながら、ミルズ本部長の後押しも大きかったよう。殺人課の男性諸君はやっかみ半分で、このジェシカ捜査官の誕生を見守っていたが……？

ジェシカはもちろん独身。そして最近、女だってそのもっている性的欲求はちゃんと「処理」しなければ……？ というわけで、ジェシカが仕事を終えて1人バーに出向くのは、酒を飲むためではなく、はっきりいえば、男漁りのため……。さて、お目当ての男をひっかけた後の行動は……？

殺人事件発生の中で、こんなジェシカのマル秘行動が暴露され、同僚の男たちからこれを冷やかされると、ジェシカは敢然と「男だって同じでしょう」と言い放ったが……。果たして、このジェシカの性生活(?)に関する私生活は、共感を得られるのだろうか……？

ジェシカ捜査官はアル中？

また映画の中、ジェシカはよく酒を飲んでいる。もちろん、これはストーリー構成上必要なものだが、毎晩自分の部屋に戻り、寝ようとする時は、いつもワインをガブ飲み状態。ある時は風呂の中でも、浴槽につかったままワインを……。

これでは半分アル中といわれても仕方ない……？ 前後不覚となり、記憶が飛ぶ状態となることを自覚しているのなら、これほど優秀な女性捜査官であれば、酒を断つべきだが……。アメリカでは、肥満を防止できないような人間は自己管理能力なしとされると同様に、アルコールを断ち切れないような捜査官では所

詮ダメなはずだが……？

優秀な女性捜査官にもトラウマが……？

この映画は、あの『存在の耐えられない軽さ』（88年）で、イギリス・アカデミー賞脚色賞と全米批評家協会の作品賞、監督賞を受賞したフィリップ・カウフマン監督の作品。したがって、当然ながらいろいろと複雑な伏線が仕掛けられている。その1つが、ジェシカが家で1人いつも見る、父親の死亡時の資料。父親が殺された時の現場の様子がきちんと保存され、それが写真として残っているわけだ。そして、ジェシカがもっている、この父親の死亡にまつわるトラウマが、この映画のラストでは、あっと驚く展開に結びつくことに……。

次々と死んでいく男たちとジェシカとの関係は？

手の甲をタバコの火で焼かれ、顔面を「柔スティック」でメッタ突きにされて死亡した第1の被害者は、何と、ジェシカがバーで「拾い」、その後男の部屋で、一夜限りの激しいセックスをした男。そして第2の被害者も、ジェシカがゆきずりのセックスを交わした男。これは果たして偶然か……？

さらに第3の被害者は、何と、ジェシカが逮捕した男の裁判で、現在対決関係にある弁護士のレイ・ポーター（D.W. モフェット）。実はこのレイ弁護士とも、ジェシカは昔一度だけ肉体関係をもった間柄。こりゃえらいことだ！ 裁判でジェシカと対決関係にありながら、そのジェシカにちょっと色目を使っている（？）レイ弁護士も悪いと思うが、自宅の庭にあるジャグジー（さすがリッチ！）の中で、血まみれになって殺される弁護士の姿を見るのは、同業の私としてはやっぱりイヤ……。こんな中、遂にジェシカは、殺人事件の容疑者として取調べを受ける羽目に陥り、さらには……？

危うくマイクとも……？

ジェシカは、優秀な捜査官としての外見とは別に、淫乱女の本性（？）をもっていることはたしかなよう……。もっとも、これはこの映画上の役柄のことであり、アシュレイ・ジャドそのものではないので、念のため……。そのことは映

画の冒頭シーン、ジェシカが半分色仕掛けで凶悪犯を逮捕した時、犯人に背後から抱きしめられ、胸をまさぐられている中で示すジェシカの官能的な表情によく現れている。ジェシカのセックスに対する能動的で動物的な欲求や、奔放な官能ぶりについての演技はお見事だが、ちょっと時代が進みすぎの感が……？

ジェシカとマイクは、長年連れ添った仕事上のパートナーであり、もちろん公私混同はなし（もっとも、レイ弁護士とは1度だけ公私混同したようだが……）。しかし、連続殺人事件の捜査が進み、第1の被害者のみならず、第2、第3の被害者も、ジェシカとセックスの関係があったことを知らされたマイクは、驚愕するとともに、自分自身のジェシカに対する男としての欲望に気づくことになった。こんな2人は、ある日、ある時、ある場所で……？

激しいキスを交わし、背後からマイクに抱きしめられたジェシカは、何ともいえない官能的な表情を……。そんな2人は、この後果たして……？

あっと驚く結末をお楽しみに！

この映画は、あくまで女性捜査官のジェシカが主人公。『テイキング・ライブス』におけるアンジェリーナ・ジョリー（スコット捜査官）は、殺人事件の容疑者に対して恋愛感情をもち、事件が「解決」した直後、激しいセックスを交わしたことが、その後の大事件に発展することになったが、この『ツイステッド』におけるジェシカ捜査官は、何しろ自分が「関係した」男が次々と殺されていくのだから、もっと深刻……。

当初は、「全く必要なし。私は心身ともに健康よ」とフランク医師（デイヴィッド・ストラザーン）に対して宣言していたジェシカは、次第に精神状態が不安定となり、悪夢にうなされ、たびたび幻覚、幻聴にも襲われることに……。ひょっとして、自分が本当に男たちを殺したのでは？ 自分の行動パターンを一番よく知っているのは誰なのか？ 自分をいつも尾行していたのは誰なのか？

一方でジェシカがそんなことを考え、他方で次々と事件がおこる中、ストーリーは次第にクライマックスに。そして、あっと驚く結末をお楽しみに……。

2004(平成16)年10月12日記